

本だいきスタッフから  
たのしみのおすそわけ

またまた集まって、第二集

おすすめの本や楽しみかたのアラカルト

みんなそれぞれ、自分流

あんなの、こんなの

いろんなことが、たのしめる

あなたの楽しみかた

みつけてください

みんなで、本を楽しもう！”

# 本好きの薦める本たち

松村一男（図書館長）

大学で学ぶことの意味や形式ははげしく変わってきている。何のために大学に行くのか？と尋ねられて、明快に答えることのできる人なんて、なかなかいないのではないかな。知識を得るためだろうか？でも、そんなのネットのウィキペディアを見れば済むことでしょう。いや、知識一般ではなくて、専門的知識を得るためかな？そりゃあ、これからの人生でやることもう決まっていれば、それもいいけど、何をしたらいいのかわからないから、大学に来るってこともあるんじゃないかな。

そう、これからどうなるかわからない未知の未来が待っているから、その未来に向かう自分を見定めるために大学に来るのだというのが一番正解に近いかも知れない。そしてその答えは授業にも友達との交流にも、そして図書館の本の中にも潜んでいて、君たちが発見してくれるのを待っているのだらう。

そうした君たちと本との幸せな出会いの手助けとなることを願って、図書館ではこれまで二冊、この冊子と同じ体裁で和光大学の教員のそれぞれが推薦する三冊の本を『本を読もう！』という題名で作ってきた（第一集は二〇〇四年、第二集は二〇〇五年）。だから、どの先生がどういう専門的見地からどういう本を君たちに読んでほしいと思っっているかは、分かるようになった。

読んでみると、たしかにいい本、役に立つ本が推薦されていると思う。それらの本を図書館で見つけてドシドシ読んで

勉強してください。でも正直いうと、大学の先生が選ぶ本はちよつと硬いというか、敷居が高い感じもする。難しそうな本が多いよね。大学の先生はみんな、自分が仕事として研究している分野に誇りを持っているから、ついつい、その分野の立派な本を君たちに薦めたくなくなるんだよね。分かる、分かる……。

そういう勉強の本はもちろん必要だが、頭よりもっと心の方に届く本も紹介したいなあと思っていたとき、図書館で仕事をしている人たちから、彼らも君たちに薦めたい本を選んでいると聞いた。図書館の人たちは教員以上に本が好きである。大好きな人たちだ。彼ら一人ひとりが君たちのために選ぶ三冊、知りたくありませんか？それから、大学のいろいろな部署で働いている職員の人たちにも本好きはたくさんいます。そういう人たちにも声をかけたら、是非とも紹介の文章を書きたいという声が上がったので、図書館員だけではな

く、大学職員の人たちにも本を選んでもらいました。

ということ、ここにこうして図書館員と職員が選んだ三冊を集めた『本を楽しもう！』―「本を読もう！」職員版―を君たちにお届けします。楽しんで読んでください。そして興味を覚えた本を図書館から借りてじっくり読んで、それから自分や社会や過去や現在や未来のことを考えてください。

本書は、二〇〇六年夏に図書館職員が  
取り組んだ「本を読もう！」図書館員版  
―」の原稿（記載の所属等は二〇〇六年  
八月現在）をベースに、二〇〇八年二月  
に他部署の職員にも募った原稿を併せて  
作成しました（同二〇〇八年三月現在）。

部署も年代も異なる人々のさまざまな  
視点が凝縮した一冊。前から読むも、後  
ろから読むも、楽しみ方はあなた次第で  
す！



学生時代の記憶が新鮮なみな  
さんに近いメンバーから  
人生の先輩である経験豊かな  
ベテランまで、原稿が勢ぞろ  
い☆

わたしたちが

好きな本を

何冊かあげると……

## 常識の逆を行く面白さ

- ①『藤田嗣治 ―パリからの恋文―』湯原かの子（新潮社）
- ②『影との戦い（ゲド戦記―）』アーシユラ・K・ルグウィン（岩波書店）
- ③『ソムリエ世界―田崎真也物語―』重金敦之（中公文庫）

図書館 森永瑞穂

①―少年藤田。ある軍人に「お前は男の子か、女の子か」と問われた際に、「おいらのは和製じゃないぜ、舶来だい」といつて男性である証拠を威張って見せたという。一九〇〇年当時、「舶来」という言葉は現在の如何なるブランドよりも高級感のあった一語ではないだろうか。だいたいにして、あの髪型、あのメガネ……。八十歳を超えて尚、変わらずに独自のスタイルを貫き通したのだから若い。いつもは藤田の描く猫の絵に魅了されて止まないが、この本を読むと、藤田

その人の生き方について、和製でも舶来でもない魅力を感じてしまう。

②―学生時代、ユング心理学にすごく興味を持った。個人的無意識、集合的無意識、影、ペルソナ等々、多感な時期に、自分の内を分析してもらえたようで、ある種の感動を覚えた。そして、時を同じくして『ゲド戦記』に出会った。「戦記」と聞くと、自称平和主義の私は一瞬たじろいでしまうが、実際、手に取ってみると、私の想像をはるかに超えて面白かった！深層心理学、タオ、仏教などあらゆる精神世界があるが、それらを見事な物語として書き上げた著者に、心から感嘆せずにはいられない。

③―ソムリエ田崎真也を知らない日本人はほとんどいない。しかし、田崎真也がどのようにして本場フランス人を差

し置いて世界一を勝ち取ったのかは広く知られていない。田崎はソムリエコンクールの決勝で、ティステイングしたワインについてフランス語で、「このワインは幼いころに遊びまわっていた庭の土の香りがする。死んだ兜虫のことを思い浮かべた」と言つて会場を驚かせた。それまで他のソムリエたちは香りについて云々、タンニンが強い云々など、どこかで聞いたセリフを並べ立てていたのに対し、田崎のコメントは衝撃的だった。さも始めから敷いてあったようなレールの上を辿る人生よりも、自分が「これだ！」と感じる道を突っ走る方が、遙かに豊かで味のある人生を送れるのではないだろうか、と思わせてくれる一冊。

幼い頃からアイスクリームを選ぶ時はいつもチョココミント、のように「安定」を図っていたが、ある時そんな自分のカラを破りたい気持ちに駆られ、冒険的な生き方に強く憧れた。

本は、変化を恐れず前に進むようにいつも私の背中を押してくれる。

## 学ぶことは、あまりに面白い

- ①『物質と記憶』 アンリ・ベルクソン (ちくま学芸文庫)
- ②『宇比山踏(「本居宣長集(日本の思想 第15巻)」所収)』 本居宣長 (筑摩書房)
- ③『歴史』上下 トウキュディエス (京都大学学術出版会)

教務課 尾崎唯

日頃、より多くの人に学ぶことの面白さを知ってもらおう手助けができたらいなと思つて働いています、その根底には自分自身学ぶことが楽しかった思い出があるように思います。

①は、西洋哲学史の物質と精神の二元論を、一人の知覚の中に折り合いをつけることが可能なんじゃないかと説いたものですが、それより何より、私にとつては何年もかけて一冊の本を読むという初めての経験をさせてくれた本です。単語の意味を調べたり、何度も読みつ戻りつすることで、ようやく一行の文章の意味が通るといふことがあるんです！独力ではなかなか最後まで読み進められない一冊も、大学には先生がいます。質問しながら、教えてもらいながら、ぜひ挑戦してみてください。

②は、沢山の宣長本の中でも、現代語訳が併記してあり初めてでも読みやすかった本です。本居宣長といえば、「国学」の学者として伝わっていますが、当時漢学が主流の中で、あえて外から知識を持ち寄って云々するよりも、自分自身の生活の中から見出したものを深める、というやり方に従った人として尊敬します。宣長自身の学問経験に根ざした学問論。「ものまなびのすじはしなじなありて……」自身の関心にしたがって勉強をすすめなさい、というのは和光のカリキュラムにも通ずるところがあるような。気になることがあれば、大学という四年間にとらわれず「膿まず飽かず」続けてください。

③―紀元前（二千五百年も前！）に書かれた文章を読むというのは、とても不思議な経験です。これぐらい昔のことになると、使われていた言葉の意味も推測するしかなく、古代語の辞書には「たぶんこういう意味」と、その言葉が使われている文章が例としていくつも挙げられていてだけ。そこから、自分で想像するしかありません。その点、私の先生だった人は、日常会話の中でも「アテネの兵士達が海を初め



て見たとき……」と身内のことに話す。その先生の話  
を聞いていると、紀元前に生きた人たちが本当にいたんだな  
と感じられた。広大なスケールの時間を共有した気がした  
が、その先生の講義は、計算すると九十分/回×三十回/一  
年間＝二千七百分。たったの二日足らずの時間で、これだけ  
古い人たちの生活を（想像力で）復元してみせる先生って本  
当にすごい。生きた学問の前に、本はかないません。

## 電車に乗って、和光へGO♪

- ①『労働法解体新書』 角田邦重、山田省三（法律文化社）
- ②『東京圏通勤電車事情大研究』 川島令三（章思社）
- ③『ミサ曲・ラテン語・教会音楽ハンドブック』 三ヶ尻正（シヨパン）

情報センター 石坂雅文

①——いま学生として、この和光大学で様々なことを学んで  
いる皆さんも、人生のどこかのタイミングで「働く」という  
ことがあるだろう。なにも就職のみを指すのではなく、いま  
アルバイトをしていることだって立派に「働いている」こと  
になる。

「労働法」とは何だろうか。それは「働く人を守り、転じてそれは会社を守ることとなり、健全な社会を守ることに  
なる」そういうシステムを示したものと、私はこの本を読ん  
で感じた。就職活動をする段階でも、実際に就職してから働  
く段階でも、自分の無知のために辛い思いをしたり、損をし  
てしまわないためにも、そのシステムの基本や精神を知って  
おくことは非常に有意義なことだと思う。

堅苦しい本ではなく、これから就職活動を始める大学三年  
生が主人公となった読み物となっているので、是非おすすめ  
したい。これを読んだ上で「ゼミの先生も、図書館の職員も、

自分たちのお父さんお母さんも、このルールに則って働いているんだなあ」と実感して貰えれば嬉しい。

②―鉄道好きであれば「ここからあそこまで鉄道があればいいなあ」とか「あの線のダイヤはこうすれば良いのに」というようなことを妄想したことがあるはず。そんな想いをどんだんふくらませてしまったものがこの本である。「△△線の複々線は生かされていない!」とか「○○駅は乗り換えが不便なのでこう改善せよ!」など、実際の鉄道について歯に衣着せぬ豪快な書となっており、読んでいて心地良い(っ)。

私たちがいつもお世話になっている小田急線についてもネタにされている。この本が出版されたのは二十年ちよつと前であり、新宿駅や町田駅の大改良が完了した頃だが、現在の梅ヶ丘―和泉多摩川間の複々線などはまだ夢物語であるような記述がされている。この時に著者が予測したり希望したり

していたことが現在どこまで実現されているのかをしてみるのも面白い。

著者は同様のシリーズの本を地域を変え時代を変え、最近も出版しているので、今の新刊の記述と二十年後がどう変わっているのかも楽しみになってきた。

③―高校で合唱部に入ってから、現在まで趣味として合唱を嗜んでいる。長年やっているとリズム感も悪いし、オンチだし……と言った恥ずかしい状態ではあるが、仲間たちと声を合わせて歌うというのは気持ち良いことだ。

合唱曲と言われるものにも新旧洋邦さまさまなジャンルのものがあるが、その中でも好きなのが主にラテン語で歌われる「ミサ曲」とか「教会音楽」と言われるものである。小学校や中学校の音楽の時間にみんなで元気よく歌うのが合唱だ!とイメージする人には、特にアカペラ(無伴奏)のよう

なものは奇異でつまらないものに思えてしまうかもしれない。ところがこれらの曲には非常に澄み渡り、研ぎ澄まされ、崇高な精神性を感じるようなモノが数多くあり、うまく歌えたときには何とも言えぬ快感を覚えることがある。私はクリスチャンではないので、信仰心もないのにこのような曲を歌うのはひよつとしたら不敬に当たるのかな？なんて感じることもあるが、少なくとも歌詞の内容や時代の背景は知っておきたい、と思って読んだのがこの本である。

ラテン語は各種ヨーロッパ言語の祖先だそうで、ラテン語の単語と英語の単語に似ているものがあつたりするなど、そういう点に気してみるのも面白い。



## 「普通」であることの安心感

- ①『ためらいの倫理学』 内田樹（角川文庫）
- ②『東京シック・ブルース』 荻原すなお（集英社文庫）
- ③『風紋』上下 乃南アサ（双葉文庫）

図書館 荒谷宏美

①—わからないものはわからないものとして、いけ好かない奴はいけ好かない奴として、ねじれている構造はねじれていることを前提として思考を進める。何でもないことのように、戦争やフェミニズムなど、古くて新しいテーマを扱っていても斬新であり、奇をてらつていなくて安心する。

いくつかの章をまたいで繰り返される次のフレーズが印象的。「私たちは知性を計量するとき（中略）その人が自分の知っていることをどれくらい疑っているか、自分が見たもの

をどれくらい信じていないか、自分の善意に紛れ込んでいる欲望をどれくらい意識化できるか、を基準にして判断する」。

②―学生運動が盛んだった一九六〇年代末、「なんとなく」上京して大学生活を送ることになった主人公。彼の周りには、学生運動に没頭する者や、自意識でがらめになっっている者など、生きにくそうな、しかし自分の信念や世の中に真摯に向き合う友人が少なからず登場する。

わりとシリアスであるし、結末も決して据わりのよいものではないのだが、それでもこの物語を読むと温かい気持ちになるのは、物語自体が（文中の言葉を借りれば）「思想」を帯びていないからであり、どの人物の生き方も許されていると感じられるからだと思う。

また「自然」で「普通」の人々（そのような熱狂的なペー  
スに決して巻き込まれない友人や、下宿先のおばさん、親戚  
のおばさん、アルバイト先のおばさん……おばさん！）が魅  
力的。主軸の重々しさと調和して、物語全体が色づいて見え  
る。

③―特に殺人事件のような、恐ろしくて取り返しのつかない出来事においては、加害者以外の全員―殺された人、加害者の家族、被害者の家族までも―が被害者になりえる。プライバシーが暴かれ、心ない中傷にさらされ、そして長いこと、その「事件」を意識した、そこに立脚した枠組みの中でしか思考できなくなるなんて、人間らしい生活とはとても言えないだろう。ごく普通に暮らしている誰の身にも起こり得るというリアリティは、身に迫るものがある。

世の中はままならぬものだけけれど、それを声高に叫ぶというよりは、いわゆる普通の人たちが自分の生活（けっこうく

だらなくて、時に素晴らしい)を貫いていくというのが、結局とても大切なんじゃないかと思ったりします。

## イメージは時空を超えて

①『K.スギヤーマ博士の動物図鑑』 K.スギヤーマ (絵本館)

②『双頭の鷲』上下 佐藤賢一 (新潮文庫)

③『広告論講義』 天野祐吉 (岩波書店)

企画広報課

堀口有希

①―スギヤーマ博士の頭の中はいったいどうなっているの!?と思わずうらやましくなってしまう。というのも、この動物図鑑、すべて架空の動物たちばかりで、だけどそれぞれ特徴や性格が、細かく楽しく描かれているのです。そしてそのどれも、自分のまわりにいそうな人なのです。かわい

い絵本を超えた、イメージの世界がぐんぐんふくらむ一冊です。デートの時、二人で読むとくすくす笑わせてくれますよ☆

②―中世ヨーロッパ、英仏百年戦争の英雄、ベルトラン・デュ・ゲ克蘭の半生を描いた一冊。これはある職員の方から薦められたのですが、最初は読みにくく、しかもまったく縁のなかった中世ヨーロッパの歴史もの。けれど、読み進めるにつれ、主人公の破天荒な性格と、無敵の強さに引き込まれました。司馬遼太郎『峠』に出てくる河井継ノ介に通じるものがあります。時間がある時、地図を片手に読むのがおススメ。

③―朝日新聞コラム「CM天気図」でおなじみ、天野祐吉氏が広告について語った一冊。広告の歴史を追いつつ、テーマごとに、天野氏らしいゆるやかな口調で、だけど鋭い視点

で広告を語ってくれています。自分の知っているCMの話ができてきたりすると一緒になって「広告批評」してみたり……。広告っておもしろそうだな、と思ったら手にとってほしい本です。

## 猫と沖縄と図書館と　くゆったりした時間の過こし方

- ①『カモメに飛ぶことを教えた猫』　ルイス・セプルベダ（白水社）
- ②『バガージマヌパナス』　池上永一（文春文庫）
- ③『図書館の神様』　瀬尾まいこ（マガジンハウス）

図書館　仲尾正司

①―題名からしても「ありえない話」だろうか。「飛べない」猫がどうやって「飛び方」を教えるのか。舞台は港町ハンプルグ。瀕死の母カモメから、黒猫ゾルバは最期の願いを

託される。一つは、今から産み落とす卵を食べないこと。一つは、ひなが生れるまで卵の世話をすること。そして、このひなに飛ぶことを教えること―。

母カモメとの約束を果たそうとする気高さ、経験不足故の知識のなさを補ってなお余りある行動力と知性、そして瞳の奥底に秘めた情熱。猫が内包するこれらの〈美しさ〉が余すところなく散りばめられている。ひなが飛ぶことを決意してからラストまでの筆致が圧巻。たとえ「ありえない」と一蹴しても、人の（否、この場合猫の）可能性に心馳せられる一冊。

②―とある南の島に住む少女・綾乃。暖かい島でその日暮らしを満喫していた綾乃に、ふとしたきっかけで島の相談事を引き受ける巫女・ユタになるようにとお告げが下された。怠け者で「超」自堕落、しかし霊と交信する力はすこぶる強

い綾乃は、抵抗を続けるのだが、そこに現れたのは意外な人物だった。

沖繩独特の空気の「ユルさ」と、その背景に流れる「先祖崇拜」の風土感覚が、リアルに混在している。現在では急速にその居場所を追われている「ユタ」だが、綾乃の現代つ子的な感覚と、亡くなった人を想う普遍的なテーマが、読者を「現代の」「どこかにあるかもしれない」シマへと誘ってくれる。

③—とある高校で国語の講師をしている清（きよ）は、なんとなく日々を過ごしているだけだった。しかし、顧問を押し付けられた文芸部のただ一人の部員や、何気なく主人公をおもいやる弟、そして無気力で無味乾燥に思われた学校生活や「文学」のようなものに惹かれはじめていく。普段自分が触れずにいたものにも、驚きや感動が隠されている。そこに

神が宿っているかのように。海の近くに建つその高校の図書室から見える四季の移り変わりも丁寧で、ゆつたりとして時間の流れを感じる。

「神様のいる場所はきつとたくさんある。私を救ってくれるものもちゃんとそこにある」。物語の最後、一年間過した高校とその町に別れを告げる清の独白が胸を打つ。

「お勧めの本」といわれて選んだ三冊の本。自分の中ではアトランダムに選んだつもりだが、「自分」を構成する三つの要素が象徴として選られたようだ。—「猫」「沖繩」そして「図書館」—三題揃でも作れまいか？

## 人生で出会う宿命的な本

①『SWAN』全14巻 有吉京子（秋田文庫）

②『李歐』高村薫（講談社文庫）

③『マリコ／マリキータ』池澤夏樹（角川文庫）

教務課 小島夕季

①―バレエを習っていた頃、レッスン中に「SWANで読んだとおりだ！」と思ったことは数え切れません。不器用だけれど天賦の才能にあふれた主人公が挫折を繰り返しながらひたむきに成長していくバレエ漫画―ひとことでは言えませんが、そこにはクラシックバレエの基礎知識はもちろん、師弟愛、多様な作品解釈の可能性、友情、舞台人としての心構え、裏切りと救し、家族関係、悲恋、成功の影にある敗者の悲哀などなど、人生(?)においてたいせつなこと

がすべて描かれていると言っても過言ではないのです。

②―心に暗い影を抱えた青年（のちに旋盤工となる）が、外国人工員と出会い、運命の波に飲み込まれるように犯罪と隣り合わせの人生を歩む……。抑えた文体で細密に描かれる男の世界は、実は現実味がないほどにロマンチック。だつて「歌を口ずさみながら中国の舞踊を舞う、美貌の殺し屋」だもの！旋盤と拳銃、漢詩と桜、町工場と教会など、硬軟とりませたモチーフの対比によって、なんとも言えない陶酔感を引き起こされます。磁石のN極とS極のように引き寄せあう二人の魂の軌跡に酔うべし！

③―新卒で就職して三年経ち、忙しさに押しつぶされそう  
で「私このままでいいのかな」と思っていた時に友人に薦められて読んで、「次の一步を踏み出す時だよ」と背中を押さ



れた気分（勝手に）なった短編集。その後、私は会社を辞めて某国に二年間留学しました。自由で生命力にあふれた女性と真面目な研究者が南の島で恋に落ちて……と書いてしまふと実も蓋もない表題作ですが、小説を読んで（その内容と直接関わるわけではないけれど）具体的な行動を起こそうと思うことってなかなか珍しいような気がします。小説からそういう“こうしてはられない感”のようなものを感じ取った自分自身を懐かしく思い出す、私にとっての「青春の一冊」です。



## 通勤電車百五十キロで世界を想う

- ①『他人（ひと）より先に洋書を読んで億万長者になりなさい』  
三浦哲（中経出版）
- ②『原点を見つめて』 曾野綾子（祥伝社黄金文庫）
- ③『いまこの国で大人になるということ』 荻谷剛彦（紀伊国屋書店）

図書館 長野真理

①——大決心して米国留学した著者は、ハンバーガーの注文さえままならなかった。帰国後、超大手進学塾に就職するも「受験産業」に嫌気がさし自分なりの学習塾を郷里に開校した。そして、開校一週間で新聞の折込み込込チラシに百万円つぎ込むも経営は赤字続き。経営の才能がないと半ば諦めかけるが、暇だけはあったので毎日図書館に通い四年間に千冊ものビジネス関連書を読んだ。しかし、それだけ読んでもそ

の時の著者にとつての良い本は見つからなかった。そんな折りに「金色の洋書」と出合った。

減点評価でなく加点評価の思考や「コントラストの原理」をはじめ、著者が会得した手法を師弟の会話形式で綴る。英語以外にも様々な方面で応用できそうなエッセンスが満載。

②―幾多もの途上国を訪ね数多くの死を目の当たりにした著者は、しばしば、日本に生まれたか途上国に生まれたかの違いを思う。地球上を見渡せば、飢餓に苦しみ医療も施されずに死を待つばかりということが、いまなおどれほどあることか。

現代に生きる日本人は、部族対立による人間の残虐さも体験し得ず、文明の発達とともに人間が失ってしまった「機能」にも思いを馳せない。教室にランプ二つを買い足してやったところで、月のない闇を四、五キロも歩いて帰る子どもにし

てみれば、明るさに慣れ過ぎることは弊害なのだ。

著者は、作家ゆえ職業カメラマン同様「一種の義務感」を持っておぞましい事態も正視したという。聖書の知識を織り交ぜた文章で「人としての原点」を描いている。

③―編者は東大の教育社会学・比較社会学者の荻谷剛彦氏で、内容は編者を含む各方面で活躍中の十六名によるものだ。「今」「日本」「大人」の三つの要素によりタイトルは成る。どの時代のどの国に生まれ育ったかによって「大人になる」ということも自ずとその社会の影響を受ける。編者は敢えてこの三つの要素をカギ括弧でくくらなかった。編者の言うところの「正解のない、堂々めぐりをしそうな」このタイトルは、その複雑さゆえに「私の思考の網」に絶妙なタイミングで引っかかってくれた。

十六名の多様な切り口・語り口の中に、何らかの発見と共

鳴があるだろう。各著者が三冊ずつ挙げる「おすすめの本」を読めば、さらなる広がりを持つて読めそうだ。

業務上、本選びの材料には事欠かないが、最近は売店の雑誌から。S市図書館（T先生も御用達）に親指一本で予約。週末迎えた本は平日に電車で。その本には別の本の情報があり、私の読書⇄予約はルールと共にどこまでも続く。

## 古典の窓辺に立ってみる

①『ソクラテスの弁明』 プラトン（岩波文庫）

さまざまな情報や価値観が氾濫する中、情報と知識の量で自分を相対的に評価したり、自らの価値観に埋没して孤独に

なったりすることから逃れるための一冊。

※『クリトン』と合本になっているケースが殆どですが、「……弁明」のみのご紹介です。

①—プラトンが、師ソクラテス最後の弁明を口語体で情景豊かに展開。「暗記できるのではないか」と錯覚するほど文章は簡潔で論理的、そして音楽のようなリズムを持っていきます。そのような文で描かれるソクラテスは、事態は深刻なのにどこか明るく、聴衆に媚びるどころかあくまで挑戦的。「神を信じず、雄弁をもつて青年を悪い方向に教育する」といった罪状への反論は、職業教育者との違いを論証するに留まらず、さまざまなタイプの人間への批判に拡がり、告発者や聴衆に深い挫折を与えます。この法廷を通じてもつとも重い罰を受けたのは「この挫折を理解しないまま死刑宣告に同意した者」として後世に名を残すことになった彼らだと、この師

入試課  
菊池昇

弟は考えているかのようです。

## 潤いある暮らしはみずみずしい感性から

①『露の身ながら』 多田富雄、柳澤桂子（集英社）

②『オリブの海』 ケヴィン・ヘンクス（白水社）

③『ハーブの図鑑』 萩尾エリ子（池田書店）

図書館 鈴木りか

①—免疫学者である多田富雄氏と遺伝学者の柳澤桂子氏の一年間に及ぶ往復書簡です。多田氏は数年前に脳梗塞で倒れ半身不随になり、柳澤氏は若い頃から難病に侵されて長い間闘病生活を送っています。二人の闘病の様子には胸を打つものがあります。お互いの病状を思いやりながら、介護の問題から環境問題など現代の文明や社会について生命科学者とし

てのそれぞれのちがった立場から意見を交わしています。自分のことで精一杯のはずなのに、他人を思いやり、日本の今後を憂い、世界の動向を心配しています。生きていることの意味を考えさせられる一冊です。書名は「露の世は、露の世ながら さりながら」という一茶の俳句からきています。

②—学生の頃、白水社から出版された海外の文学に心ときめかせていたものです。この作品は十二歳の少女マーサのひと夏のできごとがつづられています。クラスメートの死というショッキングなことから物語がはじまります。他者と自己との関係を見つめていく過程で、自我がめざめていく多感な少女の心理がみずみずしく描かれています。児童文学作家の作品ですが、大人の心にもしみわたるようななつかしさがよみがえってきます。少女の頃に『赤毛のアン』や『若草物語』の世界に没頭した人には共感できるのではないでしょうか。

③—まず写真の美しさに癒されます。料理などに使われるフレッシュハーブというと葉っぱだけ、ハーブティにはほとんどドライハーブが使われていますが、ハーブの花の可憐な美しさは想像もしていませんでした。ハーブ (Herb) とは、「薬用または芳香性の高い植物の総称」です。本書は図鑑としてだけでなく、生活に生かせる利用法など幅広く紹介され、ハーブをこよなく愛する著者のエッセイとして読む楽しさがあります。花の名前をなかなか覚えられない私ですが、すでに味覚・嗅覚で知っているおなじみのハーブからひとつずつでも覚えていきたいと思える本です。

昔は長編小説などを好んで読み、寝食を忘れてフィクションの世界に浸っていたものでした。今は残念ながら時間がなくて、小説なら短編、エッセイ、実用書などが読書の傾向になっています。選んだ三冊はもちろん最近のもので、限られた時間で読める本ばかりです。

## 大人だってワクワクしたい！

- ①『ビート・キッズ』 風野潮 (講談社文庫)
- ②『精霊の守り人』 上橋菜穂子 (新潮文庫)
- ③『リネア ―モネの庭で―』

クリステイーナ・ビヨルク文、レーナ・アンデション絵 (世界文化社)

図書館 谷口江里

以前、小学校の図書室で働いていたことがあります。書架に並んだ本をできる限り読み漁ったものです。その中には、大人向けと聞いていい本もたくさんありました。森絵都さん、角田光代さん、江國香織さん、佐藤多佳子さんなど、最

初は児童書からでした。紹介した本も、ここで出会いました。図書室って案外お宝が眠っているんですね。

①—主人公は、吹奏楽部で、パーカッションを担当する中学生。「自己PRを十文字以内に述べよ」と言われ、あせつて、「お・れ・は・す・こ・い・あ・ほ・で・す」と答える天然系。単純明快、快活な大阪弁のリズムに乗って、マンガのように一気に読めてしまいます。普段本を読まない中高生でも簡単に感情移入できるでしょう。複雑な環境の友人がいたり、家族の不幸があったり、体裁ばかり気にする先生に反抗したりするのだけど、ドリルフェスティバルという目標に向かって団結し、全力投球で乗り越えていく姿は爽やかで、学生生活っていいよね、と改めて思えます。中学生達と一緒に、泣いたり笑ったり、たくさん元気をもらえる作品です。

②—最近ファンタジーブームで、海外の多数の作品が翻訳されていますが、日本にもこんなに良い作品があることを知ってほしいです。ジャンルは児童書ですが、大人が読んでも間違いなく面白いです。この作品、まず驚くのが主人公。短槍使いの名手で雇われ用心棒のバルサは三十歳の独身女性です。クールで、めっちゃくちゃ強くてとにかく格好いい！大衆教授で、文化人類学者である作者が創る世界は地理、食物、思想など丁寧に描かれていて興味深いです。また、バルサをはじめ、登場人物がそれぞれ重いものを背負っていて、真剣に生きているところが世代を問わず共感できるのでしょうか。偶然バルサに助けられた幼きチャグムが若き皇子となり、国を救うために旅立って行く成長物語でもあり、一九九六年に第一巻が出版され、二〇〇七年に第十巻で完結した壮大な物語です（本作品は「守り人」シリーズの第一巻目にあたります）。

③—スウェーデンに住む少女リネアと退職した元庭師のブルーム氏が大好きなモネの庭を見に行く話です。ユゴーの『ノートル・ダムのせむし男』に由来するエスメラルダ・ホテル、マルモッタン美術館、モネの庭、セーヌ河など、パリの見所を案内してくれるほか、モネの家族の話や、印象派の話、絵の見方など優しく解説してくれます。どのページにも、美しい挿絵や写真があり、何だか、ちよつと疲れ気味、なんていう時に、ページをめくるだけでも幸せな気持ちになれます。

## 和光とともに駆け抜ける青春

- ①『倉本聡コレクション』全30巻 倉本聡（理論社）
- ②『小さな実験大学』梅根悟（講談社）
- ③『雑誌』カリキュラム』日本生活教育連盟（日本図書センター）

管財課 石谷潤也

①—中学、高校と見ていたテレビドラマの中で、印象に残った作品の脚本家が倉本聡とわかって以来、この作家の書いた作品、著作、雑誌記事を必死で集めました。そして作品を見ました。『北の国から』が大ヒットし、理論社より氏の様々な著作が出されましたが、その中で今までに出たこともなかった個人のテレビドラマのシナリオ全集が刊行されました。それが本書です。山田太一作品、向田邦子作品とともにテレビドラマ黄金時代を築いたシナリオ作品をご堪能あれ。

②―北海道の片田舎より東京に出てきて、入学登録で梅根悟学長の学長講和を聞き、「和光に入つてよかった」と思いました。以来三十数年お世話になっていきます。和光大学の草創期の教育方針や学長講和が収録され、和光大学の創立時の夢が語られています。当然私が聞いた学長講和も収録されています。本書は和光大学の原点を記したものです。ちなみにこの本を編集したのは、当時の和光大学広報委員会で、その委員長は先ごろお亡くなりになった高杉一郎（小川五郎）先生です。

③―こんな資料もありますよということで紹介します。今の図書館（附属梅根記念図書館）が竣工しており、記念に梅根悟先生の書誌を作ろうということで、その作成グループに加えさせてもらい、新聞・雑誌を担当しました。そのおり、

この雑誌とつきあいました。現在の『生活教育』（日本生活教育連盟、和光小学校が事務局）の前身の雑誌で、昭和二〇年代半ばより、日本生活教育連盟に結集した和光学園の教師たちが精力的に教育実践を行い、論文を発表しています。節目に和光の学園史も出ていますが、戦後復興した和光学園の写真も多く掲載されており、和光大学の母体である、和光学園を知る資料にもなっています。





## 絵やスケッチを楽しむもう！

①『アンデスまでとんでった ―ペルー・ボリビアスケッチ紀行―』

浜田桂子（講談社）

②『気分はおすわりの日』 伊勢英子（中公文庫）

③『よあけ』 ユリー・シュルヴィッツ（福音館書店）

図書館 相原郁生

ここに取上げられた作品は、いずれもほのぼののとして心に残り、今でもときおり手にとつて眺めています。是非、読んでみてください。

①―全編手書き構成のペルースケッチ旅行記です。

手書きということにこだわり、いっそう「わくわく感」をかき立てられ、興味がわいてきます。

著者の目で好奇心いっぱいの様子が生き生きと描かれていて、読む者を知らず知らずに行っている気分になさせてくれます。ガイドブックにはない新鮮な感覚で、読むというよりも見るといふ感じで、分かりやすく表現してみせてくれます。

旅先の様子が、著者の鋭い観察眼によりリアルにわかり易く目に飛び込んで、どのページも、印象的なスケッチで爽やかな風が流れているかのような作品です。

②―家族の一員であるハンディを持った犬が主人公です。もの言わない彼が、深い愛情に支えられ、さりげなく一コマを、切り取ってつたえてくれます。

生き物を飼うということは、大変なことでありますが楽しいこともあり、実にたくさんの事柄を学ぶものです。文と絵によって、もの言わぬ彼が雄弁に語りかけてくるように、読

む者に伝わってくる作品です。

①の作品同様、ものの方に対し、カメラなどを使用せず巧みにその技術で見せてくれる作品です。

③―最後に紹介したい作品は、絵本です。作者は、ポーランドの人、東洋の作品に造詣が深く、唐の詩人によるものがベースになっています。

子供に読ませてあげたいものですが、私は大人に読んでもraithたい作品だと考えます。

心穏やかにし、ページをめくり想像してみてください。殆ど漆黒の世界での物語ですが、その闇の中で多くイメージが浮かんでくるような作品です。

時間をつくり、パラパラとしてみるのも大切かもしれません。

## 問いを発してみよう！

①『幻想の未来 ―唯幻論序説―』 岸田秀 (講談社学術文庫)

②『世間学への招待』 阿部謹也 (青弓社)

③『苦難の乗り越え方』 江原啓之 (パルコ出版局)

図書館  
藤崎淳

①―実に刺激的な本である。初めて読んだ時の、こういう見方もあるのかという感動は忘れられない。幻想と分かっているながらも、幻想という「形」|| 「物語」がないと不安で不安でたまらない人間の現実が見えてくる。「色即是空 空即是色」の世界である。岸田のいう「共同幻想」と「私的幻想」という言葉の奥の深さにリンクしているのが次の二点の本である。

②―「共同幻想」―「世間の粹組」―「世間体」の現象を具体的に見せてくれる。「世間は全体として差別的体系なです」という阿部の知見は、言葉が差異化されることによって意味をもつ仕組みに重なって見える。世間は異質なものを排除することによって、「中心」が「周縁」に対して安定化を計ろうとする。世間は「成ること」を求める。個人の行動に規範を与える。「世間」―「説明の体系」によって人間の自我は社会を形成しようとするのである。世間という「形」―「物語」―「共同幻想」から外れないことによって、人間は社会的認知を得たと安心しているのである。

③―カバ―の帯に付いている言葉がおもしろい。「スピリチュアリズムは〈魔法〉ではありません。この本の誤用にご注意下さい」。

「私的幻想」―「物語」―「自我」、つまり個人の思い込みについて、違った見方があるのだということを実感させてくれる。言葉の意味が関係性においてあるように、人間の存在も他者との関係性において「在る」ことに気付かさせてくれる本である。しかし、「物語」を信じない人間にとっては、この本は何の意味もない。占いも然りである。人間は「物語」を信じることによって安心できるのである。

問いを発してみよう！なぜ「物語」は必要なのか？人間は何を見ているのか？人間の認識する世界は幻想なのか？眼に見えないものこそ面白い！本を読もう。

## 風呂場で読書

- ①『日常茶飯事』 山本夏彦（中公文庫）
- ②『偏見自在』 中山千夏（文春文庫）
- ③『食は胃のもの味なもの』 小泉武夫（中公文庫）

図書館 亀田俊一

勝手に本を読む条件を付け足したい。風呂場で読む三冊の本を推薦するということにする。私の流儀では風呂に入るとき左手に本を持ち右手で下洗いをして湯につかる。五分から八分は湯船の中で読めるが左手でページをめくったり、持っていないくはならないと考えると薄手の文庫本が望ましい。当然、湯船の中で読み切れる短編小説か随筆、読み物、筋を覚えているほど面白い小説になるだろう。毎日、風呂に入っただけでも一月以上かかるからである。

一冊目は山本夏彦の『日常茶飯事』中公文庫一九七八年である。単行本が出たのが一九六二年でその数年前の雑誌『室内』にのせた随筆というかコラムを集めたものである。四十年以上前のものだが、文章は簡潔でわかりやすい。もつともその中に操觚者、醜の御盾、胆豆など辞書を引かなくてはわからぬ単語も混じっている。話題はあちらこちらに飛ぶが、同じテーマを繰り返し話し話題にしているところもある。「君子多忙」「スピードきちがい」は交通機関の発達で人はかえって不幸になったさまを描いている。読んでいて小気味いいほど今までの普通の考え方をひっくり返してくれる。

二冊目は中山千夏の『偏見自在』文春文庫一九八〇年だ。千夏といえば筆者は映画「がめつゝい奴」の子役ぶりを覚えているが、その後TVタレント、声優、歌手（あなたの心に）

は名曲だ)、作家、議員と八面六臂の活躍をなしている。この本は一九七五〜六年に月刊誌に連載したエッセイを集めたもの。その頃はまだかなり影響力をもっていた『主婦の友』などの月刊婦人誌を題材に、性を中心とした様々な話題を鋭くかつ軽やかに切り込んでいる。その後休廃刊が相次いだ婦人誌をたちゆかせなくした真の原因にも思われるくらいである。この軽やかさを味わえる作家はほとんどいない。脱帽である。

三冊目は小泉武夫の『食は胃の味のなもの』中公文庫一九九七年だ。原著は一九九一年刊で前二冊よりは新しい。著者は東京農大の教員で発酵学の権威だがC級グルメとして有名である。この本も安くて簡単でおいしい料理のレシピとそれにまつわるエピソード集である。だじやれの大好きな先生でタイトルもほとんどがだじやれで中公文庫としてはかなり

異質な気もするが、とにかく、食は人を元気にさせる。この本も食の話題だけで人を元気にさせる。暗い気分ときはこの本を読んで風呂上がりに、ビール片手でこの中の一品を作ってみるのもいいのではないかと考えるのである。

さて、この三冊、あなたに気に入ってもらえただろうか。

## 時には「決意と根性」！ 本を通して時代や人間と向き合おう

①『敗北を抱きしめて ―第二次大戦後の日本人―』上下

ジョン・ダワー (岩波書店)

②『〈民主〉と〈愛国〉 ―戦後日本のナショナリズムと公共性―』

小熊英二 (新曜社)

③『8月の果て』上下 柳美里 (新潮文庫)

事務局長 山下健

侵略と敗北が生み出すありとあらゆるものの破壊、耐え難い内に萌芽する再生。引き摺っているもの、見失ったものと見出したものの、僕の内では混沌として整理できないでいる「現代」の諸相のそもそものは。それがこれらの本を手にとった動機です。何故三冊とも大部なものばかりなのか。取り掛かるのには決意と根性が要りそうだし、何しろ本代が高いではないか。でも理由があります。「時代物」が好きで藤沢周平などに溺れてしまい、いままた佐伯泰英千冊に挑戦などと馬鹿なことをやっているのですが、時には「決意と根性」で時代や人間の縦軸と横軸に入り込んでみたい欲求に駆られること。そしてこれが肝心なのですが、図書館にはそれらの全てが揃っているということ。大学に無ければ公共図書館にきつとあるのです。相性のいい本は棚からじつと見つめて声をかけてくれます。

「すつすつはつはつすつすつはつはつ……」『8月の果て』の全編を貫くフレーズで、第一章のタイトルが「失われた顔と無数の足音」。過去と現在、侵略した日本（人）と踏みこじられた朝鮮の大地と人間、それを踏みしめ踏みしめ走る息遣いなのです。三冊の本に通徹するのがこの時代と人間の息遣いのような気がします。

『敗北を抱きしめて』はクダクダ僕が紹介するより著者の言葉を引用します。「日本は……最も苦しい敗北を経験したが……自己変革のまたとないチャンスに恵まれた……〈よい社会〉とは何なのか。この途方もない大問題が敗戦の直後から問われ始め……男が、女が、そして子供までが、それを真剣に考えた」。この本は和光大学に些かのつながりが。著者は「憲法改正……に関して、もつとも鋭い学術的研究を公刊した」古関彰一と紹介、また訳者は「英文の疑問点解消に多

くのヒントを得た」ロバート・リケットと記しています。「子供から天皇まで、占領軍の下級兵士からマッカーサーにまで及ぶ」あらゆる資料に基づいた日本人の戦後史が綴られる長〜い本ですから、飽きてきたら箸休めに『東京セブンローズ』（井上ひさし・文藝春秋）などどうぞ。「占領下の日本語を救った女たちの物語」で、これは肩こらずに面白い。

『民主』と〈愛国〉は「戦争の記憶と〈戦後〉の姿が…：私たちの過去を問い、現在の位置を照らします…：戦後思想史の一大叙事詩」と帯に。暇と興味があれば『日本人』の境界』と『単一民族神話の起源』にも手をのばして「目から鱗」、手軽にとという方には『日本という国』（理論社）がおすすめ。

## 酩酊しても心は錦

①『涙をたらした神（吉野せい作品集）』吉野せい（彌生書房）

②『ビールと古本のプラハ』千野栄一（白水社）

図書館 山田幸雄

①―無名のおばあさんの渾身の書である。

一生をかけ、福島山麓の開墾生活を大正時代から夫、吉野義也（詩人三野混沌）とはじめる。開墾生活で過ごした女性の強さ、したたかさが情愛に裏打ちされて匂いたつような文だ。六人の子をもうけ辛い開墾農業を夫と共に体験してきたエピソードを記す。

思えば開墾でなくとも、明治、大正、昭和（戦後まで）の農村での生活は厳しかっただろう。老いた百姓女、吉野せいの希有な文才によって、その生活の一断面の厳しさに照明が

当てられる。

我が子ツトムの出征で、磐越東線に乗り、会えるか会えないかわからないツトムのいる会津若松の営舎、面会までのことを記した『鉛の旅』にも、昭和二〇年という太平洋戦争末期の出征兵士の見送り風景を鉛の群れと表現する。忘れられつつある母の感情だ。

吉野せいは一八九九年四月、福島県小名浜生まれ。検定で教員資格をとり一九一六年より二年間小学校教師を勤める。

一九二一年阿武隈山系菊竹山麓の荒地の小作農民、吉野と結婚。一九七七年没。享年七十八歳。

②―ビールのおいしい飲み方を、何かの懇親会のおり、千野先生（元学長、元図書館長）がおっしゃったことがある。

確かビールを注ぐときの角度やら、泡と液体の割合やらをおっしゃったのだが、一番印象に残ったのが、注ぎ足しはうま

くない、ということである。

いつかコマーションで放映していた、まずビールを一杯という仕事帰りのサラリーマンの、グイと一気に喉に流し込む忘我の表情には、五臓六腑に沁みわたるといふ表現がびつたりだ。この「最初にビールを」というのが大方の飲兵衛の夏の作法かな。うまさぞ、この一杯。

そこで、飲み干してしまえば二杯目だ。それなら、注ぎ足しという問題にはならない。ところが途中で、どうぞと注ぎ足しにくる人がいる。つい有難うございますとかなんとかいって注ぎ足してもらうのが、これがいけないとビール飲み達人、千野先生はおっしゃっているのだろう。

チェコ人のビール好きは、『プラハの江戸っ子屋』というエッセイの中にトラックの運転手と医者のお話で、医者「これはうまい。階段の七段目が一番いい温度だつてカレルどうして気づいたのか、教えてくれないかね」運転手「長年の経



験ですよ。六段目では暖かいし、八段目ではもう冷えすぎ」  
医者「なるほど」地下の食糧置場への階段のどこへビールを  
貯蔵したら味がいいかという話だ。

もうひとつ、ビール好きなチェコ人のこだわりは自分好み  
のビールを台湾や日本へでも瓶でもっていくという。

千野先生がプラハの江戸っ子屋とよんでいるのは、こ  
zlatého tygra (ウ・ズラテーホ・ティグラ||「黄金の虎」  
の意)という名のプラハにあるビアホールだそうだ。常連客  
の座る場所が何曜日かで決まっているという。地元の人しか  
行かない小さな店だ。だから江戸っ子屋だそうだ。

まあ一言でいえばビールがまたうまく飲めそうな本です。

あとの半分、古本のほうは、千野先生の本好きの一面が出  
ている。社会主義時代のプラハの古本屋では、十数件の古本  
屋のうちどの分野の本を選ぶかで、その中の半分ほどをまわ  
れば用が足りたそうである。ピロード革命後の一九九五年に

なると古本の価格が高騰し、資本主義の波が及んできたこと記  
されている。

言語学の泰斗、千野先生には『プラハの古本屋』(大修館  
書店刊)という著作がある。恩師徳永康元先生という方の『ブ  
タペストの古本屋』(恒文社刊)と一対をなすかのようであ  
る。恩師に書名についてお許しを得たとあとがきに出てい  
る。



どうやって

本を手に入れるか？

では、ここであげられている本を手にするにはどうしたらいいのか。「借りる」と「買う」のふたつの場合に分けて、ざっと説明しておきます。

## 【借りる】

◎和光大学図書館の特設書棚で借りる。

和光大学図書館内に書棚を特設しました。そこに、ここで推薦された本を、基本的には何冊かずつ置いてあります。場所はカウンターの先、レファレンス・コーナーの入り口の

あたりです。

関連本その他、知りたいことがあれば遠慮せずに図書館員に相談してください。

◎近所の公共図書館で借りる。

小説や軽いエッセイ集といった比較的やわらかな本は、専門書中心の大学図書館よりも、近所の公共図書館のほうががしがしやすいでしょう。

いまは公共図書館でも目録をオンラインで公開しているところが多いので、図書館に行くまえにインターネットで調べておくと無駄足を踏まずに済みます。

ちなみに、和光大学図書館は町田市立図書館と協力貸出の協定をむすんでいます。つまり、和光の図書館カウンターで町田市の本も借りられるというしくみができているわけですから、どしどし使ってみてください。

## 【買う】

◎新刊書店で買う。

いまは一年に八万冊以上の本が出版されています。この数は、いっぴんの書店に扱える量をはるかに越えています。

したがって、ちょっと古い本やあまり売れない本は、たちまち書店から姿を消してしまいます。オンライン目録を公開している大型書店の場合、前もってインターネット在庫の有無をしらべておくといいでしょう。

いそいで入手したい場合はオンライン書店を利用するといいい。もちろん送料はじぶんで負担しなければなりません（友だちと共同で何冊か購入すれば、ほとんどのオンライン書店で送料がタダになります）。

◎古書店（古本屋）で買う。

ふらりと入った古書店で必要とする本をピタリと探せる可能性はほとんどありません。古本屋は「本との偶然の出会い」をたのしみ場と割り切ったほうがいいでしょう。

ただし、山とか映画とか植物などの専門書店のばあいは別です。じぶんが関心のある分野の専門書店をみつけておくといいでしょう。

したがって、すぐ欲しい場合は、オンライン古書店の利用をすすめます。複数の古書店が共同でひらいているホームページがいくつもありま

すから、それをつかえば、たいいていの本は見つかると思います。

もちろん、ネット・オークションでやすく入手することもできます。すぐに必要な本にぶつかる可能性はあまりありませんけどね。

# 「本を楽しもう!」第二集ブックリスト

2008.3現在

## あ行

- 1 『アンデスまでとんでった』 浜田桂子  
講談社 1991年 1,325円
- 2 『いまこの国で大人になるということ』 荻谷剛彦  
紀伊国屋書店 2006年 1,785円
- 3 『宇比山踏』(『本居宣長集(日本の思想 第15巻)』) 本居宣長  
筑摩書房 1969年 780円
- 4 『オリーブの海』 ケヴィン・ヘンクス  
白水社 2005年 1,680円

## か行

- 5 『影との戦い(ゲド戦記I)』 アーシュラ・K.ル=グウィン  
岩波書店 2006年 1,050円
- 6 『カモメに飛ぶことを教えた猫』 ルイス・セプルベダ  
白水社 2005年 840円
- 7 『カリキュラム』[雑誌] 日本生活教育連盟  
日本図書センター
- 8 『気分はおすわりの日』 伊勢英子  
中央公論新社《文庫》 1999年 560円
- 9 『苦難の乗り越え方』 江原啓之  
バルコ出版局 2006年 1,260円
- 10 『倉本聡コレクション』(全30巻) 倉本聡  
理論社 1983年~1985年 @1,529円
- 11 『K.スギヤーマ博士の動物図鑑』 K.スギヤーマ  
絵本館 1991年 2,520円
- 12 『幻想の未来 唯幻論序説』 岸田秀  
講談社《文庫》 2002年 1,008円
- 13 『原点を見つめて』 曾野綾子

祥伝社《文庫》 2006年 630円

14 『広告論講義』 天野祐吉

岩波書店 2002年 1,785円

**さ**行

15 『食は胃のもの味なもの』 小泉武夫

中央公論新社《文庫》 1997年 469円

16 『SWAN』(全14巻)[マンガ] 有吉京子

秋田書店《文庫》 1995年～1996年 @590円

17 『精霊の守り人』 上橋菜穂子

新潮社《文庫》 2007年 580円

18 『世間学への招待』 阿部謹也

青弓社 2002年 1,680円

19 『双頭の鷲』(上・下) 佐藤賢一

新潮社《文庫》 2001年 @820円

20 『ソクラテスの弁明』 プラトン

岩波書店《文庫》 2007年 483円

21 『ソムリエ世界一 田崎真也物語』 重金敦之

中央公論新社《文庫》 1998年 760円

**た**行

22 『ためらいの倫理学』 内田樹

角川書店《文庫》 2003年 680円

23 『小さな実験大学』 梅根悟

講談社 1975年 700円

24 『露の身ながら』 多田富雄, 柳澤桂子

集英社 2004年 1,470円

25 『東京圏通勤電車事情大研究』 川島令三

草思社 1986年 1,427円

26 『東京シック・ブルース』 芦原すなお

集英社《文庫》 2000年 780円

27 『図書館の神様』 瀬尾まいこ

マガジンハウス 2003年 1,260円

**な**行

28 『日常茶飯事』 山本夏彦

中央公論新社《文庫》 1978年 652円

**は**行

29 『ハーブの図鑑』 萩尾エリ子

池田書店 1999年 1,680円

30 『敗北を抱きしめて』(上・下) ジョン・W. ダワー

岩波書店 2001年 @2,310円

31 『バガージマヌパナス』 池上永一

文藝春秋《文庫》 1998年 590円

32 『8月の果て』(上・下) 柳美里

新潮社《文庫》 2007年 @740～780円

33 『涙をたらした神』(吉野せい作品集) 吉野せい

弥生書房 1974年 1,680円

34 『ビート・キッズ』 風野潮

講談社《文庫》 2006年 490円

35 『ビールと古本のプラハ』 千野栄一

白水社 1997年 945円

36 『他人(ひと)より先に洋書を読んで億万長者になりなさい』 三浦哲

中経出版 2004年 1,365円

37 『風紋』(上・下) 乃南アサ

双葉社《文庫》 1996年 @800～900円

38 『藤田嗣治 バリからの恋文』 湯原かの子

新潮社 2006年 2,100円

39 『物質と記憶』 アンリ・ベルクソン

筑摩書房《文庫》 2007年 1,365円

40 『偏見自在』 中山千夏

文藝春秋《文庫》 1980年 252円

## ま行

- 41 『マリコ/マリキータ』 池澤夏樹  
角川書店《文庫》 2006年 500円
- 42 『ミサ曲・ラテン語・教会音楽ハンドブック』 三ヶ尻正  
ショパン 2001年 1,890円
- 43 『〈民主〉と〈愛国〉 戦後日本のナショナリズムと公共性』 小熊英二  
新曜社 2002年 6,615円

## や行

- 44 『よあけ』 ユリー・シュルヴィッツ  
福音館書店 1977年 1,260円

## ら行

- 45 『李歐』 高村薫  
講談社《文庫》 1999年 750円
- 46 『リネア モネの庭で』 クリスティーナ・ビョルク  
世界文化社 1993年 1,529円
- 47 『歴史』(上・下) トウキュディデス  
京都大学学術出版会 2000年～2003年 @4,410～4,620円
- 48 『労働法解体新書』 角田邦重、山田省三  
法律文化社 2004年 2,100円

- このリストは「本を楽しもう！」(第2集)の本文で紹介されている本を、50音順に配列したものです。データは、書名、著者名、出版年、価格の順で記してあります。
- 作品によっては様々な出版年、出版社から出版されていることもありますが、比較的購入しやすいものを優先して掲載しています。
- 価格は税込表示です。「@」は多巻本の単価を表し、また、「@○円～□円」は各巻の価格帯を表します。
- 原則として図書館で所蔵していますが、入手困難につき所蔵できなかったものも数点あります。お困りの際は、図書館カウンターでご相談ください。